

# 和彫りの粹

鈴木綾華、川村隆太

背中から足にかけて彫られた大きな竜、肩や腕に彫られた鮮やかな鯉。気楽にワンポイントできるタトゥーとは違い、刺青に対して多くの人は怖いという印象を抱くのではないだろうか。日本で刺青はあまり身近なものとは言い難い。そんな中、刺青師は一体どういった思いで働いているのだろうか。

「和彫りの魅力は粹だね」

戦国武将や桜など日本の伝統的な題材を描いた「和彫り」を専門とする刺青師の彫祐さんは強く優しい目をしながら語る。小学生のころ、父親と行った銭湯で和彫りを彫った男性の大きな背中を見て、刺青に対する憧れを抱いた。17歳のとき初めて刺青をし、その4年後、刺青師になる決意をして修業をはじめた。現在35歳になり、東京・台東区のマンションの一室に店を構え、刺青の道を極め続けている。作業は和室で布団の上に客が横たわった状態で行われる。値段交渉やデザインの相談を含め一日にだいたい四人の客が来るそうだ。和彫りには手先の器用さはもちろんのこと、日本美術に対する深い理解と日本人としての美的感覚も必要とされる。

「私観だけど、一人前の彫り師になるには最低でも十年はかかるね」

師匠の下での修業には大変な苦勞が伴う。まず、最初に自分の太腿を彫って練習し、その痛み能耐えられるかが第一関門となる。それから、弟子同士で彫り合い、友達に彫ることで経験を重ねていく。こういった過酷さから弟子入りした人の半分以上は途中で修業をやめてしまうそうだ。修業を終え、一人前になると刺青師としての名前を持ち、店を出す。彼も「彫」という字に自分の名前から一文字つけた「彫祐」として自分の店をはじめた。

「いろんな人と出会い、その人たちの他では聞けない話が聞けること。その人の生き様を感じることができる」彫裕さんは刺青師になって良かったことをそう語った。

タトゥーは機械で彫るのに対し、和彫りは一つ一つ手で彫っていく。その為和彫りにはお金と時間が掛かるが、機械では生み出せない手彫りの味が生まれる。

「時間とお金をつぎ込み、痛み能耐えるからこそ一生ものになり、粹が感じられる」

さらに、和彫りは扱える色が機械と比べて少ない。しかし、彫祐さんは限られた色の中で表現することにこそ魅力があると言う。

和彫りは日本の文化であり、刺青師は日本の誇るべき芸術家だ。

## 編集後記

薄暗いマンションのドアの前で、インターホンを押した後の我々には緊張感がものすごく

い勢いで走っていた。取材させてもらう方は、普段は接する機会があまりない刺青師の方である。どんな方なのだろうかという好奇心と不安感が仲悪く同居した形だ。しかも、私の初めての取材である。ドアが開いた。そこには雰囲気のとて良いおじさんが立っていた。瞬間的に私は部屋を間違えたんだと早とちりしてしまったぐらいである。主に刺青から刺青師としてのキャリアについて聞かせてもらった。知らない事ばかりで、とても有意義な取材となった。途中、取材である事を忘れてしまったぐらいである。一番、興味を持ったものはそのお店の空間である。畳が敷かれていて、清潔感の溢れる明るい部屋だった。映画などの中から得た情報で、そこは暗くてじめじめした場所なのではないかという勝手な想像を抱いていたので、驚いて印象に残ったのだろう。とても刺激的で楽しい取材となった。刺青を彫ってもらう機会ができれば、ここで彫ってもらおうか。

川村流太

今回は刺青についての記事を書かせていただきました。刺青も刺青師も今まで自分の生活とは無縁だったので記事製作を通してはじめて知って驚くこともたくさんありました。インタビューさせていただいた彫祐さんはとても気さくな方で本当に貴重な経験をさせてもらいました。記事を読んで和彫りの魅力に惹かれた方はぜひ彫ってみてください(笑)。今回の記事で得たものを次に活かしていけたらと思います。

鈴木綾華